

## 「非教」と「護教」のせめぎ合い —1922年の広東における「非キリスト教」運動—

朱 海 燕

### はじめに

1922年3月に、世界キリスト教学生同盟の第11回会議が北京・清華学校で開催されることに反対して上海では中国社会主義青年団臨時中央を母体にする「非キリスト教学生同盟」が結成され、同月9日に共産主義色の濃い宣言文が発表された。その2日後、北京でも北京大学のマルクス学説研究会員を主なメンバーとする「非宗教大同盟」が組織され、3月17日に五四新文化運動以来の反宗教思潮を基調とする宣言文が発表され、これに北京大学長蔡元培と同大学の教授李石曾、王星拱、呉虞、李大釗など著名な学者や汪兆銘、胡漢民など広東軍政府の高官たちも名を連ねた。この二つの組織の呼びかけのもと、3月から6月にかけて中国各地では一部の知識人と青年学生を主体とするキリスト教への反対運動が行われ、それは広東、福建、湖南など全国の10の省に燃え広がった<sup>(1)</sup>。このように1922年の「非キリスト教（以下、非基と略す）」運動がスタートし、それは1927年まで断続的に続く1920年代の反キリスト教運動が幕を開けたことを意味する。

なかでも広東は非基運動の重要な舞台であった。当時広東軍政府（第2次）の管轄下にあった広東はまた、キリスト教の一大拠点でもあり、「非

教」をめぐり反対学生とキリスト教知識人の間で白熱した議論の応酬があった。本稿の目的は、この1922年の広東における非基運動に光を当て、いったんは沈静化し2年後に同地を中心に再発する反キリスト教運動とどのようにつながっているのかという問題を中心に、その歴史的重要性を考察することである。

ここで1922年以後の反キリスト教運動の流れを簡単に説明すると、1922年の非基運動はこの年の夏には沈静化する。しかし、1924年1月に国共合作が正式に成立して広東での革命の気運が高まり、イギリスと広東軍政府（第3次）の間の緊張感が広州の聖三一学校ストライキとして噴出すると、かねてからのキリスト教学校教育に対する危機感と国家主義派などの教育権回収の主張を背景に、事件はミッションスクールの教育権を回収する主権回収運動に急展開し、反キリスト教運動の再開をもたらすことになる。そして1925年に反英感情による五・三〇運動が発生し6月から省港ストライキが始まると、広東は一気に全国革命の中心となり、東征を成功させ広東国民政府を成立した国民党は、1926年7月ついに「帝国主義と売国軍閥を打倒して人民の統一政府を建設する」ための北伐を開始し、1927年には南京を占領しそこに蒋介石の南京国民政府が立ち上げられるのである。このように、広東は1924年以後中国の国民革命の拠点となり、また1920年代の教育権回収運動と反キリスト教運動再開の震源地となっていくのだが、後者の二つの運動の土台を築いたのが1922年の非基運動であると筆者は考える。

これまで1922年の広東における非基運動について比較的詳しく論じた研究者は、管見のかぎり1920年代の反キリスト教運動の研究で知られている楊天宏と査時傑のみである<sup>(2)</sup>。しかし2氏とも1922年の一連の非基運動の一事例として広東を取り上げているだけで、その重要性については十分に認識されておらず、運動の全体像も明らかにされたとは言い難い。

以下の考察では、反対運動の言論拠点である『広東群報』と、それに対する反論拠点ともいえる『真光雑誌』が出した『批評非基督教言論彙刊全編』（1927年刊）を主たる資料に、広東における反対運動とキリスト教側の反応に焦点を当て、1922年の広東の非基運動の全貌を明らかにしたい。

## I 広東における「非キリスト教」運動

非基運動時、広東は北京政府に反対する広東軍政府（第2次）<sup>(3)</sup>の管轄下にあった。広東省長で内務総長、陸軍総長を兼任した陳炯明（1878-1933年）は、1920年11月広西軍閥の手中から広東を奪還してから、広東で積極的に新思想を提唱し新文化を発展させ、陳独秀を誘って教育改革を行うなど、一連の改革を推進した<sup>(4)</sup>。そのため、1922年前半の広東は政治的統制が厳しい北京に比べその雰囲気比較的自由に、同年5月に開催された中国社会主義青年団第1回全国代表大会や第1回全国労働大会などは、いずれも広州で開催された。広東における非基運動は1922年3月中旬から始まったが、それは『広東群報』、国民党幹部汪兆銘、そして学生たちによる反対運動と三つの主体があった。

### 1 非基の言論拠点『広東群報』

『広東群報』<sup>(5)</sup>は広東出身の陳公博（1892-1946年）、譚平山（1886-1956年）、譚植棠（1893-1952年）らが、1920年10月に広州で創刊した日刊新聞で、編集長は陳公博であった。同年に北京大学を卒業して広東に戻った3人は、広州公立法政専門学校（以下、公法と略す）と広東高等師範学校（以下、高師と略す）で教授をするかたわら、陳炯明の経済的援助を受けて『広東群報』を発行し、広東で新思想やマルクス主義、社会主義を宣伝した<sup>(6)</sup>。創刊号には北京大学時代に3人と師弟関係にあっ

た陳独秀が「警告広東青年」の一文を寄せている。譚ら3人は上述した身分のほか、1921年組織された中国共産党広東支部の初期責任者でもあり、譚平山が書記、陳公博と譚植棠がそれぞれ組織委員と宣伝委員を担当していた<sup>(7)</sup>。

『広東群報』による反対の動きは上海の非基学生同盟の紹介に始まる。3月16日同紙は世界キリスト教学生同盟会議開催に対する反響として非基学生同盟の公電と宣言文を掲載した<sup>(8)</sup>。その後同月25日から反対言論を本格化させ、「非基の言論」——（これは4月24日前後に「非宗教の言論」に改名される）——という特別コラムを新設して反対運動を鼓吹し、5月19日までほぼ毎日反対言論を掲載した。

そのなかで有名なのは、赤光の「基督教与世界改造」（3月25日）や陳独秀の「基督教与基督教会」（3月31日）、朴の「為甚麼反对『世界基督教学生同盟』大会？（なぜ「世界キリスト教学生同盟」大会に反対するのか？）」（4月10日）、H.G.（蔡和森）の「基督教—近代思想—資本主義」（4月14、15、17-21日）などである。これらはいずれも上海の非基学生同盟が編集したパンフレット『我們為甚麼反对世界基督教学生同盟』（1922年3月20日刊）に収録されたものである。同パンフレットは全14篇からなっているが、そのうち9篇は非基学生同盟が社会主義青年団の機関紙『先駆』第4号を利用して発行した『非基督教学生同盟号』（1922年3月15日刊）<sup>(9)</sup>に収録されていた。そのほか、このコラムには陳公博や譚平山が教えている公法や高師の学生たちによる反対言論も数多く載せられ、4月下旬になるとほとんど彼らの文章で占められるようになる<sup>(10)</sup>。

また、非基運動のもう一つの重要な推進力である北京の非宗教大同盟の動きにも注目し、3月27日その宣言文を転載したことを皮切りに、その反対活動について積極的に報道した。それだけでなく、北京の非宗教大同盟と上海の非基学生同盟に呼応して立ち上がった各地の非基・非

宗教の運動についても気を配り<sup>(11)</sup>、地元広東の青年学生たちの反応についても敏感にキャッチして報道した。後述する学生たちによる反対運動の再現はこれらの記事に頼るところが大きい。

このように『広東群報』は、確かに張亦鏡のいう「広東非キリスト教の大本営」であったが、主要な創設人の政治的立場と掲載された関連記事から見る限り、上海の非基学生同盟の見解を代弁するものであり、非基運動を引き起こした社会主義青年団の宣伝機関の役割を果たしていたといえよう。

## 2 非基運動の重鎮——汪兆銘

日本人にも名がよく知られている汪兆銘（1884-1944年）は広東省番禺県の人で、字を桂辛、号の精衛という。1903年官費留学生として来日した彼は1905年に横浜で孫文に会い、それ以来孫文の忠実な追隨者となる。東京で中国同盟会の機関誌『民報』の編集に携わったことがあり、1910年ラストエンペラー溥儀の父摂政王載灃の暗殺を企てたが失敗し、その才を惜しんだ摂政王が彼の死刑を免じたという逸話は有名である。その後清王朝が倒れたことによって釈放された彼は、中華民国成立後には孫文を助けて袁世凱の北京政府と戦い、1917年には広東軍政府の樹立にも尽力した。1919年パリ講和会議時には広東軍政府より広東代表としてパリ講和会議出席の命を受けたが、辞退して単独にてフランスに赴いて考察を行った。その後、第2次広東軍政府が成立した後1921年孫文の招請を受けて広東軍政府の最高顧問となり、広東教育会長と教育委員会常務委員に就任した。教育会長になって以来、彼は「教育費を以前より3倍に増やして、国民の教育事業の振興をはかり」<sup>(12)</sup>、全国教育会連合会を招致して広州で同連合会第7回年会（1921年10月26日から同年11月6日まで）を開催するなど<sup>(13)</sup>、広東の教育事業とその威信の向上に力を入れた。

北京で非宗教大同盟が結成された後、汪兆銘はかねてから親交のある蕭子昇（旭東、1894-1976年）の誘いによってすぐにそのメンバーになった<sup>(14)</sup>。蕭は蔡元培、李石曾らがフランスで組織した中仏教育会の秘書で、また北京大学ドイツ語学科の学生で北京共産党組織の指導者の一人だった羅章龍（1896-1995）の友人——2人とも五四期毛澤東が組織したことで有名な湖南の青年組織新民学会のメンバーで、蕭は初代会長であった——だった。非宗教大同盟が結成されてまもなくフランスから帰国した蕭は羅に同盟への参加を誘われ、蕭は彼自身だけでなく李石曾、汪兆銘にも同盟への加入を勧めた<sup>(15)</sup>。汪兆銘はフランス滞在時、李石曾、蔡元培と一緒にリヨン中仏大学の設立にかかわったことがある<sup>(16)</sup>。

1922年3月末、汪兆銘は北京の非宗教大同盟に呼応して、まず広東省教育会でキリスト教を批判する発言をした。それは3月29日に「力斥耶教三大謬見（キリスト教の三大謬見を力強く斥ける）」というタイトルとして広州の各新聞に載せられた<sup>(17)</sup>。その内容は、汪が第一公園で見かけた布教用の張紙に対する批判からなっている。発言のなかで汪は、張紙の「イエスを信じるものは天国・極楽世界を楽しむことができるが、イエスを信じないものは、永遠に死に地獄に落ちて苦しむ」「イエスは天命をうけた天子であり、天下万国の太平皇帝になる」「天公真神は、天をつくり、地をつくり、日月・風雲・雷雨をつくり、山川河海・五穀百果をつくり、万物を化生した」<sup>(18)</sup>という文言を問題視し、キリスト教は狭隘で酷烈きわまりないもので、進化の学と一切の科学の敵であり、社会教育を行う上で大いに妨害になるものだとして厳しく糾弾した。これは亡き国民党幹部朱執信のキリスト教への批判に同調するものであった<sup>(19)</sup>。

4月1日には広東省教育会会長の名義で非宗教大同盟宛てに「東電」を打ち支持を表明した<sup>(20)</sup>。その後も、「要慎重些」、「非宗教論」、「国民教育論」など反対文章を発表して、引き続き非基運動を声援した。

そのうち、「要慎重些」は時評である。彼はこの文章のなかでキリスト教会が組織した「廃娼」を呼びかけるデモ隊に幼い女子生徒が動員されていることを問題視し、社会の恥部である娼妓の排除問題に娼が何かも知らない幼い女子生徒を動員するのはよろしくない、これは「偽善な教会諸君」が「題を借りて出しゃばりたい」からに違いないと非難した<sup>(21)</sup>。この批判は強引なところがあり、事によせて所見を述べた疑いが強いといわざるをえない。

「非宗教論」はミッションスクールの非信徒学生への待遇を指摘したものである。この文章のなかで、彼はミッションスクールが行っている宗教教育に批判の矛先を向け、「学生を引き入れて入信させるときに、もっぱら学生の恐怖心を利用している」ことと、入信していない学生から多額の学費を徴収しているながら、学校では小人数である彼らに礼拝を強要することを指摘し、これら2点とも教育原理に違反するものであり許せない行為だとして批判した<sup>(22)</sup>。

「国民教育論」は、国民教育の高みに立ってキリスト教教育の危害を論じたものである。彼はこの文章のなかでキリスト教会が設立した中小学校が行う教育は宗教教育であって決して国民教育ではないとし、その教育を受けた学生は心の中に神だけがあり、中国の存在を知らないという。そこでこれを正す抜本的な方法として、公立と私立の中小学校をたくさん設立して、非教会系の子弟がミッションスクールに入ることを絶つことを主張し、ミッションスクールが国民教育を妨害するのを防ぐためには、教会系の中小学校に対して制限を設けるべきだという。つまり、第一に、教会は中小学校を設立してはいけない。最大限に譲歩するとしても、教会が設立した中小学校は信徒の子弟だけを受け入れるべきである。第二に、大学に宗教科を設け、学生の研究に供することにする。第三に、凡そ宣教は礼拝堂のなかにおいてのみ許す<sup>(23)</sup>。これらの三つの制限策を提示した。このように汪はミッションスクールの教育趣旨を問

題視し、それへの制限を主張した。1924年以後、ミッションスクールはその宣教を目的とする趣旨のため、度々非難・攻撃の俎上に載せられるが、1922年の非基運動においてこの点を最も厳しく批判したのは汪であった。1924年以後のミッションスクールの中国化（中国政府への登録）は、このような国民教育論を背景に進むのである。また、日本の南満州鉄道付属地における対中国人学校教育への批判もこうした国民教育論によるものであった。

以上見てきたように、汪兆銘のキリスト教への反対は、国民教育の立場に立つキリスト教教育への危機意識が含まれていた。これは、当時の北京、上海などの都市の理性主義や共産主義に基づいた非宗教・非基よりも、さらに一步踏み込んだ反キリスト教的な主張であり、1924年から始まる教育権回収運動を予兆させるものであった。

### 3 反キリスト教学生組織の形成とその活動

広東はキリスト教の教育事業が発達したところで、そこには嶺南大学をはじめ数多くのミッションスクールがあった<sup>(24)</sup>。非基運動期間、キリスト教に反対する学生組織ができたことによって広州では、キリスト教系の学生大連合と非宗教学生同盟会という学生の二大勢力が対峙する場面が出現した。前者に属していたのが、嶺南、南武、培英、育才、聖三一、青年会付属学校と教会付属学校の学生たちであり、後者に属していたのが、高師、公法、広東甲種工業学校、広東公立農業専門学校（以下、農業と略す）、執信学校の学生たちであったという<sup>(25)</sup>。

最初に反対組織を結成したのは陳公博が教鞭を執っていた公法の学生たちであった。彼らは北京と上海の非基学生同盟の広東で支部をつくってほしいという電報を受けて非基学生同盟を組織した<sup>(26)</sup>。その後高師にも非基学生同盟が組織され、4月7日付の『広東群報』によると、全校生の3分の2がこれに参加したという<sup>(27)</sup>。一方、高師、農業では北

京の非宗教大同盟に因んだ非宗教学生同盟がつくられた。このように、広州における学生たちの反対組織は最初から非基と非宗教の2派に分かれていた。それだけでなく、一つの学校でこの2つの組織がそれぞれつくられることもあった。高師がその典型である。『広東群報』によると、高師のこの二つの組織は、「同一の目的を抱いているが、しかしながら非宗教と非基の二つの部分に分かれて各自に進めており、互いに妨害しない」<sup>(28)</sup> という。両組織の違いについてはこれを述べた資料がないためはっきりすることはできないが、おそらく上海の非基学生同盟を支持するものが非基を、北京の非宗教大同盟を支持するものが非宗教を名乗ったのであろう。広東の非基と非宗教に分かれた学生による反対組織は、最後に省レベルの広東非宗教大同盟下に結集していくことになる。そのプロセスは省レベルの非基学生同盟の建立から始まった。

1922年4月16日に省レベルの非基学生同盟を組織するための会議が広東省教育会のホールで開かれた。会議には千人あまりの学生が参加した。公法の学生沈厚培（春雨）が主席に推され、会議では何覚甫が作成した同盟「章程」が議決・通過された。また、会議では各部門の委員が選挙され、投票の結果、沈厚培、藍祥奎、何覚甫、陳淑君（汪兆銘の妻陳碧君の妹）、廖夢醒（廖仲凱の長女）、阮熙朝（嘯仙）、周其鑑、劉爾崧ら35人が委員に選ばれた<sup>(29)</sup>。そのなかには沈厚培、何覚甫、阮嘯仙をはじめ多くが、1か月前の3月14日に再結成されたばかりの広東社会主義青年団員であった。4月18日には委員会による職員選挙会議が開かれた。会議によって何覚甫が委員会主任に、藍祥奎、陳書平、廖夢醒、阮嘯仙、林亮東、周其鑑ら7人がそれぞれ出版、財政、講演、庶務、交際、調査などの部門の主任に選出された。また、会議では、文牘部が通電と宣言を作成して4月24日までに新聞に掲載することを決定した<sup>(30)</sup>。その後4月23日に再び委員会議を開いて文牘主任周其鑑が作成した宣言と通電を承認し、財政や会の所在地、印章、徴求などの問題につ

いても議論して解決案を通過させた<sup>(31)</sup>。それから数日後、新聞に「非基督教同盟敬告学生（非基同盟は敬んで学生に告ぐ）」という宣伝文を発売した。この宣伝文は、キリスト教会とキリスト教徒が学生たちの社会改造事業と科学の研究を破壊、邪魔していると述べながら、「とりわけ憎むべきは、女子学生を布教の利具（誘い道具）としていることだ」と、女子学生に警鐘を鳴らしている<sup>(32)</sup>。しかし、これを最後にこの広東非基学生同盟に関する報道はしばらく見られなくなった。

一方、非宗教同盟に参加している学生たちも省レベルの組織をつくるために動き出したようである。『広東群報』によると、同同盟は広州の各学校をまとめて広東非宗教大同盟を組織するために、第2回会議を開いてその進行方法を討論し、また各学校の非宗教の学生たちを誘い、4月23日に教育会を借りて会議を開くことを決定したという<sup>(33)</sup>。これはおそらく広東非基学生同盟が組織されたことに刺激されての行動だと思われるが、しかし、これについてもまたこのニュースを最後に新聞紙上から姿を消した。

しかし、両組織の活動はこれで終わったのではなかった。しばらく姿を消していた広東非基学生同盟のメンバーの名前は、約1カ月後の『広東群報』にふたたび現われた。5月21日に広東非宗教大同盟が省教育会のホールで成立大会を開いたが、彼らの中の何人かがその委員に選ばれ、名前を連ねたのである。実はその前から公法の学生組織である群声学社が広東非宗教大同盟の結成に取りかかっていたようである。5月17日に準備会議が開かれ、30あまりの団体がこの会議に出席した。彼らは高師の代表莫耀焜を臨時主席に推して、同盟の章程と進行方針を議論し、群声学社の代表何寿英を臨時幹事主任に、郭寿華、莫耀焜ら6人を臨時幹事に選出した<sup>(34)</sup>。この準備会議で21日の成立大会の日程が決まり、それは取りも直さず非基同盟と非宗教同盟の連合のための大会だったのである。大会では譚平山が主席を務めた。彼は大会で「非宗教

と非基の両同盟は、いずれもその宗旨は宗教を打ち破ることにあり、ただその範囲が広いか狭いかのことで普遍的であるか否かの違いがあるだけである。だから、両同盟は互いに兄弟のように手をつなぐがよろしい。決して名義がちがうからとして、互いにねたみ合っただけではない<sup>(35)</sup>と、両組織を一つにすることこそが成立大会の開催理由であると述べた。だから広東非基同盟のメンバーもこの成立大会に出席しているのである。この成立大会では章程が決議され、譚平山、何寿英、沈厚培、何覚甫ら49人が各部門の委員に選ばれた<sup>(36)</sup>。

その後5月24日に、広東非宗教大同盟は公法にて委員大会を開き、各部門の主任を選挙した。その結果、周其鑑、施崎、陳公博、何寿英ら7人が選ばれ、陳公博と何寿英がそれぞれ正副の委員主任に任命された。この委員会議では、全国に通電を出すことや宣言文やピラをまくことなども討論された<sup>(37)</sup>。

このように、広州市内の非宗教と非基に分かれていた反キリスト教学生組織は、広東共産党と青年団の主要責任者であり、公法や高師の教授譚平山、陳公博らの斡旋と影響力の下で、最後に広東非宗教大同盟という組織のもとに再編され、青年団のコントロールの下に置かれたのである。

非基の動きは広州市内の学生にとどまらず、すぐにその他の学校と周辺の各県に拡大していった。前後して潮州中学校、南海中学校、広東鐵路専門学校、省立第二師範学校、広州光塔街警監学校、汕頭広東省立嶺東甲種商業学校、広東公医医学専門学校、省立梅州中学校などの学校が非宗教の声明や通電を出し、信宜、茂名、電白、香山、白山、霞山、三水、開平、新会などの県においても、非基学生同盟を組織したり、支持を表明する文章を発表したりする動きがあった<sup>(38)</sup>。

最後にこれらの学生組織による反対運動について簡単に触れることにしよう。その反対方式は主に言論や文章を用いての批判・攻撃であった。

前述したように、『広東群報』の新設されたコラムに反対言論を載せたほか、宣言文や通電を出して運動を声援した。広東非基学生同盟と高師の非基学生同盟は、それぞれ『広東非基督教学生同盟週刊』と『広東高師非基督教学生同盟週刊』を発行して、積極的に反キリスト教の宣伝活動を行った<sup>(39)</sup>。その内容をみると、YMCA やそれが発動した社会の悪習を打破しようという「貞潔運動（娼妓運動）」、そしてミッションスクールを非難するものが多かった。茂名、電白、香山、白山、霞山、三水、開平などの数県の学生によって組織された「県非基学生同盟」は、週刊・日刊の刊行物を発行するほか、学生を派遣して街頭演説をも催した<sup>(40)</sup>。

また、高師の非基同盟は、普通選挙運動会が高師を借りて会議を開いた際に、学生を派遣して同盟が出版した「女界普選運動と非基督教（婦人界の普通選挙運動と非基）」という宣伝ビラを出席した各婦人界の人々に配り、婦人の人格を勝ち取ろうとするなら、婦人の人格を蔑視するキリスト教にも反対しなければならないと主張した<sup>(41)</sup>。そのほか、広東非基同盟は、公法や工業が卒業旅行の機会を利用して台湾などに宣伝しに行くこと<sup>(42)</sup>や、黄花崗72烈士の告別式の日（4月27日）に大規模な宣伝活動を行うことなども計画していた<sup>(43)</sup>。こうした非基学生との摩擦を避けるためか、広州のミッションスクールの学生たちは世界キリスト教学生同盟大会の北京での召集を祝って準備した「大巡行」を取りやめることにしたという<sup>(44)</sup>。

以上、見てきた学生たちによる反対のほか、広州では労働者による反対組織も現れた。広州「工社」のメンバーらによる「非基工人同盟」がそれである<sup>(45)</sup>。また、新聞界においても「非宗教記者同盟」を組織しようとする動きがあった<sup>(46)</sup>。このように広東におけるキリスト教への反対運動は教育局長汪兆銘と学生たちの積極的な参加、それらを熱心に報道・宣伝した『広東群報』の働きによって盛んに行われ、北京と上海に次ぐ運動の中心地となった。

## II キリスト教側の反応—広州の『真光雑誌』を中心に

では、この非基運動にキリスト教側はどのような反応を示したのか。当時中国ではカトリックとプロテスタントを合わせて約 240 万人のキリスト教徒がいた<sup>(47)</sup>。非基運動に反応したのは主にプロテスタント系の新聞雑誌であった。『1901-1920 年中国基督教調査資料』(1922年初版)によると、1920 年中国には上海中華広学会 (Christian Literature Society for China) 等 29 のプロテスタント系の出版機構があり、1921 年には 107 種のキリスト教系の中国語の新聞雑誌が刊行されていたという<sup>(48)</sup>。そのうち、発行部数が多いのが『時兆月報』(33,500 部)と『通問報』(7,000 部)、『青年進歩』(7,000 部)などであった<sup>(49)</sup>。

非基運動発生後、北京証道団の『生命月刊』や上海 YMCA の機関誌『青年進歩』、『中国教務雑誌 (The Chinese Recorder)』等、多くのキリスト系雑誌がこれに反応した<sup>(50)</sup>。そのなかでもっとも激的な反応を示したのが広州の『真光雑誌』(隔週誌)であった。

### 1 広東におけるキリスト教の発展状況

広東はキリスト教の勢力が盛んなところで、1807 年モリソンの来華以来ずっとプロテスタントの重要な拠点であった。1920 年のデータによると、広東では 43 のミッションが宣教活動を行っており、924 か所の教会堂と 1,061 か所の布教区を有し、信徒数は 61,262 人で全国トップであった<sup>(51)</sup>。これは 2 位の山東省 41,821 人の約 1.5 倍に当たり、全国信徒総数の約 2 割を占めていた。また、教育事業も発達しており、初等教育から高等教育まで完備していた。詳しくみると、初級小学校 675 か所で学生数 19,057 人、高級小学校 122 か所で学生数 4,510 人、中学校 37 か所で学生数 1,929 人。そのほか高等学校の嶺南大学と協和女子

師範学校があった<sup>(52)</sup>。カトリックの信者数は124,124人（香港、マカオを含む）で、広州市内には聖心中学、明德女子中学と日新小学などの初等教育機関があった<sup>(53)</sup>が、その規模はプロテスタント系の学校に比べてかなり小さかった。

## 2 『真光雑誌』とその主筆張亦鏡

『真光雑誌』<sup>(54)</sup>は、アメリカ南部バプテスト連盟（Southern Baptist Convention）により派遣された宣教師チェンバーズ（Rev. Roberts E. Chambers, 1870-1932, 中国名は湛羅彌）牧師が1902年に広州で創刊したものである。1895年に広州に到着した彼は、当地の文字伝道の遅れを憂い、広州および各省のバプテスト系宣教師やアメリカ南北バプテスト連盟等に印書局を設立することを訴えた。それで1899年に広州に美華浸会書局（The China Baptist Publication Society）が設立され、主に伝道用パンフレット、『聖書』と四福音書、内部向けの説教叢書、日曜学校用テキスト、定期刊行物などを出版した。『真光雑誌』は当印書局のもっとも重要な出版物で、創刊当時チェンバーズ牧師が主筆を、広東・新会出身の陳禹廷が副編集長を担当した。刊行当初の名称は『真光月刊』で、1906年に『真光報』（月報）に改名、1916年5月には隔週刊にし『真光』と改称し、1917年からさらに『真光雑誌』に改称、1923年1月から隔週刊を月刊に戻した。1925年省港ストライキの影響で印刷工場の労働者がストライキをして美華浸会書局が閉鎖されると、同誌編集部は上海に移って刊行を続け、書局の方も1926年に中華浸会書局と改称して上海で開業したが、1941年太平洋戦争が勃発すると日本によって『真光雑誌』は停刊させられた。『青年進歩』、『真理与生命』と並んで中華民国期三大キリスト教系刊行物に数えられる。

この『真光雑誌』の主筆として有名なのが張亦鏡（1871-1931年）<sup>(55)</sup>である。彼は「護教明星」として広く知られていた。張亦鏡は、広西・

平楽県出身で、名は文開、字は鑑如、亦鏡は彼のペンネームである。7歳から私塾に通い、15歳の時隣村の周という挙人（郷試に合格した者）に師事、同年父に科挙試験を受けるよう命じられるも「異族の奴隷になるまい」「体制に縛られたくない」として拒絶。17歳の時には同姓の張という貢生（院試に合格して郷試参加の資格を持つ生員の優秀な者で、国子監で学ぶことを許可された者）に師事した。

張亦鏡が、初めて『聖書』に出会うのはその17歳の時であった。ある日張貢生のところで勉強したときによく通う雑貨店で古い本を見つけ、面白そうだったのでそれをこっそり袖の中に隠して持って帰ったが、それが新約聖書だった。しかし2、3ページ読んだところでつまらなかったの箱の中にしまった。翌年の春、その本を借りて読んだ友人が「とても面白い小説」だと絶賛したことで、再び興味を持ち最初から最後まで真剣に読み、その後何度も読み直したという。その後、バプテスト教会の信者だった親戚の家で福音を聞き入信した。彼22歳の時だった。同年（1892年）広州に行き、グレイヴス（Rev. R. H. Graves, 1833-1912, 中国名は紀好弼）牧師のところで聖書を勉強した。グレイヴスは1856年にアメリカ南部バプテスト連盟より派遣されたアメリカ人宣教師で、著名な医療宣教師で神学教育家である。彼はまた美華浸信書局の理事でもあった。張は彼のところで半年ほど勉強したのち、父の反対で帰郷を余儀なくされ、私塾で教える傍らやや古くなった『万国公報』や日報を読みながら知見を広げた。1899年には廖卓菴等の紹介によって香港で『中国郵報』の撰述員（記者）になるが、半年後辞職して帰郷した。その後1905年広州で再び廖卓菴に会い、彼の引き留めにより当時『真光報』だった『真光雑誌』の編集に加わることになった<sup>(56)</sup>。そして1920年にチェンバーズ牧師から編集の全権を任せられ主筆になった。以後数度の短期間の離脱はあったものの1931年に亡くなるまで前後25年間同誌の編集に尽力した。『真光雑誌』の編集部から離れてい

た時には、香港で『談天週刊』や『大光報』の編集に携わっていた。

### 3 『批評非基督教言論彙刊』、『続批評非基督教言論彙刊』の出版

北京、上海で世界キリスト教学生同盟会議に反対する非基運動が盛んに行われているニュースが広東に伝わると、『真光雑誌』の3人の編集者張亦鏡、梁均黙（1899-1975年）、譚希天は、これを非基者の主張に論駁すると同時に文字布教の良い機会と捉え、すぐ反論に出た。当時すでに『生命月刊』と『青年進歩』の批判文章が出版されていた<sup>(57)</sup>が、いずれも理性的にキリスト教への誤解などを指摘したもので、反論というよりは批評の性格が強かった。

キリスト教が劣勢に置かれたかに見えた頃、1922年5月1日『真光雑誌』は、第21巻8,9冊を合冊にして非基の言論を批判する特集号『批評非基督教言論彙刊』を出版した。その表紙の右上には皮肉を込めて縦書きに「中華民國知識階級がキリスト教に向かって総攻撃を下した記念品」という一列の文字が刻まれていた。そしてその翌月にも第21巻10,11冊を合冊にした『続批評非基督教言論彙刊』（1922年6月1日刊）を出版し、反対者たちと真正面から衝突した。この2つの特集号は大変な人気を博し、販売部数は合わせて5万部を突破した（当時『真光雑誌』の刊行部数は約2千部であった）。これらの特集号、とりわけ『批評非基督教言論彙刊』の出版によって『真光雑誌』と張亦鏡は一気に有名になった。それは反対運動の発生で意気消沈した信徒たちを鼓舞しただけでなく、多くの人たちのキリスト教への関心を引き出し、これらの特集号を読んだことがきっかけでクリスチャンになった人が少なからずいたという。もちろんこれはまた間接的に非基運動の知名度を高めることにもつながった。『真光雑誌』の反撃は同年10月まで続き、第21巻19冊までずっと非基の言論に論駁する文章を載せ続けた。のちにそれらの反論文章と2つの特集号は、張亦鏡によって一冊にまとめられ『批

評非基督教言論彙刊全編』（中華浸会書局，1927年刊）と題して出版された。

では、この『批評非基督教言論彙刊全編』をもとに、張亦鏡らの反撃の経過を見てみよう。最初のターゲットは上海の非基学生同盟とそれが出した特集号『非基督教学生同盟号』（1922年3月15日刊）であった。まず、梁均黙が『真光雑誌』を代表して全体的な感想と態度を述べたのち、張亦鏡と梁均黙はそれぞれ分担して特集号に載っている文章を原文付で逐一論駁しはじめた。その最中、非基運動が北京に飛び火して非宗教大同盟が結成され通電と宣言文を発表し、周作人ら北京大学の5教授が宗教に対して「挑戦的」に反対することを問題視して「信教の自由を主張する宣言」を発表したニュースが広州に伝わると、これらにもページを割いている——「信教の自由を主張する宣言」を紹介した後、張亦鏡は広州などの地域の反対運動の激しさに嘆き、その後ろに数ページにおよぶ関連記述を書き記している——。そして全国的に知名度の高い汪兆銘の基督教に対する言論が新聞に掲載され大きな反響を呼ぶと、『非基督教学生同盟号』のなかの文章を逐一批判するのを一旦は止めて汪兆銘の言論にターゲットを変えた。その後北京の非宗教大同盟が4月9日世界基督教学生同盟会議の閉会に合わせて講演会を開き、また『非宗教論』（1922年刊）という反対文章を集めた本を出版すると、張亦鏡らは再び矛先を北京に向け、北京大学長蔡元培の講演稿と故国民党幹部朱執信のイエスを非難した有名な文章「耶穌是什麼東西」の2篇に絞って論駁した。その後再び『非基督教学生同盟号』に焦点を戻すのだが、北京の反対運動に後押しされて上海での非基運動がピークを迎え、『覚悟』（『民国日報』の特殊ページ）に大量の非基・非宗教の言論が発表されると、今度はそちらに注目し周作人らの宣言をもっとも辛辣に批判して非基運動を支持した沈玄廬（定一，1883-1928年，中国共産党創始者の一人で後に国民党右派になる）の「敢問非宗教信徒底反对非

基督教運動（非宗教信者たちの非基運動への反対について敢えて問う）」について論じ、筆致からみて上海の非基学生同盟の宣言文や通電を作成したのは沈かもしれないと断言した<sup>(58)</sup>。その後、「信教の自由」をめぐる論戦がさらに進んで、維新変法で名を馳せた梁啓超も「非非宗教者」の立場で非基運動に対する態度を表明し「評非宗教同盟」という文章を發表すると、それにも言及している。このように『真光雑誌』反撃は非基運動の流れに沿って行われ、広東だけでなく、上海、北京などの都市における反対運動をも反論の射程内に入れていた。つまり、『真光雑誌』は全国各地の非基運動を相手に戦ったのであった。

そのほか、クリスチャンで当時広東軍政府司法部長であった徐謙（季龍，1872-1940年）や、のちに中国青年党に加入する常乃徳（燕生，1898-1947年）、武漢聖公会報記者などによる、キリスト教会の立場を同情、支持する言論をも載せている。また、反論文章のなかには「批評繆鳳林之非耶教」のように張亦鏡が読者の要請に応じて批評したのもあった。

その反論の内容は非基の言論に応じて、主に「非基言論」の論弁態度についての反駁、非基運動が信仰自由の権利を干渉したことについての批評と論駁、キリスト教は反科学だとする論についての反駁、キリスト教を「侵略道具」とする論についての反駁、キリスト教が国民教育を危害するという論についての論駁、の五つに分けられる<sup>(59)</sup>が、紙幅の関係で具体的な紹介は割愛する。ここでは張亦鏡の書いた「罵人骯髒東西底阮嘯仙（人を汚いものと罵る阮嘯仙）」という文章を例に、その弁論の鋭さと攻防の激しさの一端を見ることにしよう<sup>(60)</sup>。これは阮嘯仙の書いた「不可理喻的真光雜誌底一班骯髒東西（道理が通じない真光雜誌の汚いものたち）」という文章に対する反駁文である。

『広東非基督教学生同盟週刊』第3号において、阮嘯仙—広東省立甲種工

## 「非教」と「護教」のせめぎ合い

業学校の学生一が本誌に論駁する文字を書いた。タイトルは「道理が通じない真光雑誌の汚いものたち」である。文章のなかで私たちをライスクリスチャンだと、キリスト教に入信しなければ飯が食えず生きていけないと罵った。また私の言論を勝手に割ったり切断したりして詭弁の術を施した。これは誠にまったく理性のない妄言であるが、しかしこれによって彼の「明白さ」「辛辣さ」と「良心のなさ（昧良）」「狂暴さ」を全部さらしてしまった[中略]

私は今たいへん率直に嘯仙にいくつか言いたい。君（「你」）のような人は現在実に社会主義など講ずる資格がない。君が現在読書している甲工学校は何のお金でつくられたか考えたことがあるかい？君が毎食食っている飯はどこから来たか考えたことがあるか？新聞の掲載によると、貴校甲工（広東省立甲種工業学校の略称）の経費はもっとも汚い「花捐（広東軍政府が娼妓から取る税）」で維持されているようだ。君が現在まさに食っているその飯は多くの人間地獄のなかでもっともかわいそうな姉妹たちが彼女らの人格と引き換えに取ってきたものだ。君は毎回飯を食う時にこのことを思いつくといつたいどのような感想がするか私は分からない！人を「骯髒東西」と罵るこの4文字を今そのまま鄭重に送り返す。君はそれをひそかに受け取りなさい。

お、私はこれで君が力を尽くしてキリスト教に反対する理由がわかってしまった。キリスト教徒が広州で廢娼を運動しているから、これは実に君の致命傷だな！なるほど！だから君の校長龍先生も新聞で大げさに非基を鼓吹しているんだね<sup>(61)</sup>。

この文章から張亦鏡の筆致の辛辣さがよくわかる。『真光雑誌』の批判文章はほとんどが張亦鏡一人によるもので、梁均黙と譚希天はそれぞれ4篇と1篇しかない。1925年中華全国基督教協進会幹事鐘可託は「中国教会概況」の中で、キリスト教会の人々の1922年の非基運動につい

での態度に触れ、おおよそ「反論して相誇り、力を尽くして抵抗する型、  
「取るに足らないと思ひ、素行を貫き相手にしない」型、「虚心に研究し、  
よく反省する」型の三つの態度があったという<sup>(62)</sup>が、そのうち「反論  
して相誇り、力を尽くして抵抗する」というのはまさに『真光雑誌』の  
態度を指すものといえよう。

ではなぜ多くのキリスト教系新聞雑誌が大きな反応を見せなかったの  
に、『真光雑誌』は積極的に反応し反撃に出たのか。一つは張亦鏡の性  
格と護教の経験が彼をそうさせただろう。黄増章によると張は強い民族  
的自尊心と偏執に近い自信の持ち主で性質がひねくれて協力しにくい人  
だという。また、文筆が果敢で文章がうまいが、性格が強情で人と争う  
ことが好きで、そのゆえ彼が編集する雑誌はいつも論駁文を発表してい  
た。最初は経綸の学に富んでいる「博学鴻儒」に弱いところを攻められ  
誹られたが、彼は怯えず数年貯めた給料で本をたくさん買い、病気だと  
嘘ついて休みをとり半年間家で一生懸命に読書して、それから文章が以  
前よりさらにうまくなり論述の文章もいっそう増えたという<sup>(63)</sup>。こう  
いう論議が好きな性格のせいか、彼は1922年以前にすでに2回も筆戦  
をした経験を持っていた。一つは1917年香港で『大光報』を編集して  
いた時で、当時孔教会を支持する人々がつくった『國是報』と筆戦を繰  
り広げ、相手の新聞をして3度も論者を換えさせ最終的に相手を黙らせ  
た。張亦鏡はのちにこの筆戦を『大光破暗集』（美華浸会書局、1923年  
刊）と題して出版している。もう一つは1919年、チェンバーズ牧師が  
アメリカに戻ったことによって美華浸信書局編集部が汕頭に移ったとき  
のことである。汕頭の長老教会系の華英学校で孔子参拝を要求する学生  
のストライキが発生し、学校当局はこれに反対した。このことをきっか  
けに長老教会と学校当局を非難する地方の人士と、編集部の移動によ  
って汕頭に来ていた張との間で筆戦が起こり、彼は『真光報』を利用して  
孔子参拝に反対する特集号を出版した。この筆戦ものちに『華英拜孔風

潮記』と題して美華浸信書局より出版されている<sup>(64)</sup>。このように彼は論争の達人だった。

もう一つは、張亦鏡を含む『真光雑誌』編集部の中に誰にも劣らぬ護教の情熱であったといえよう。1925年5・30事件の影響を受けて広州でイギリスによる6・23事件（「沙基惨案」ともいう）が発生すると、張は『真光雑誌』で「イギリスに関する公論を發表することができない」ことを理由に、編集長を一時期辞任したことがあった。この時、彼が以前香港で編集に携わったことのある日報『大光報』から同日報の改造の重任を担ってほしいとの要請があった。彼は、最初はこれを固なに断り当時すでに国民党に加入して広東政府で働いていた梁均黙を推薦するが、梁の、もうすぐ非基運動週（クリスマス期間に行われる反キリスト教のキャンペーン）がやってくるのに広州には「キリスト教徒に貸して言論機関とする日報が一つもない」、今度も非基者たちが無実の罪を教会に着せるに違いないから、同日報の編集になって言論で対抗してほしい、という勧告を聞き入れ、最終的に同日報の編集を承諾した経緯があった<sup>(65)</sup>。このように張にとってキリスト教を守ることは何よりも大事であった。そして張亦鏡が編集の全権を持っていたことがこのような一致団結した反駁を可能にしたのが、張らの護教活動に対して創刊者のチェンバーズ牧師やアメリカ南部バプテスト連盟などはどのような態度を取っていたかについては不明である。今後の課題にしたい。

## おわりに

1922年の広州の非基運動は上海と北京からの影響を受けて始まったが、すでに見てきたように、それは学生だけではなく、汪兆銘などの国民党の要人や譚平山（後の国共合作期の農民部長、『中国農民』の編集長）らの左翼系知識人、新聞記者、労働者たちの参加もあって大きな盛り上

かりをみせた。この運動を通じて広東の学生たちは五四運動以後再び学生運動を経験し、この時彼らによってつくられた人的、組織ネットワークは1924年以後の教育権回収運動と反キリスト教運動の基礎となった。また、当地は統一した国民国家の建設を目指す広東軍政府の所在地だったこともあり、共産主義を掲げる上海と五四新文化運動以来の科学や理性による反宗教を訴える北京に比べて国民教育論による反対という性格が強く付与されていた。1924年の教育権回収運動はまさにこのような土壤に培養されて起きたのである。

一方、広州では張亦鏡の『真光雑誌』を中心に積極的に護教活動が行われ、全国の非基・非宗教の人々を相手に一生懸命に戦った。しかし、残念なことに『真光雑誌』の抵抗は紙上での舌戦に終わり、キリスト教への反感を払拭することができず、1924年以後のキリスト教会に対する反対運動を未然に食い止めることができなかった。張らキリスト者たちは非基運動を支えているのは、反帝国主義を主要内容とするナショナリズムであることに気付かなかつた。だから、広東政府とイギリスとの緊張が高まると、イギリス系のミッションスクールで学生ストライキが起こり、広州を震源地に反キリスト教運動が再開したのであった。1924年以後、『真光雑誌』と中国のキリスト教会を待っていたのは全国を席卷する反帝国主義の嵐であった。これについては論を改めて論じたい。

## 注

- (1) 上海と北京の運動の発生要因とその経緯については拙稿「中国の共産主義と反キリスト教運動—1922年の世界キリスト教学生同盟会議の開催への反対—」『アジア研究』第62巻第3号、2016年7月、69-85頁を参照されたい。
- (2) 楊天宏『基督教与民国知識分子』（1995年刊『基督教与近代中国』の修訂版）北京：人民出版社、2005年、118-125頁。査時傑『民国基督教史論文集』台北：

## 「非教」と「護教」のせめぎ合い

宇宙光出版社、1994年、159-161頁。近年、肖承望の「大革命時期広東の非基督教運動」(『羊城今古』2005年3期、25-28頁)や、伍玉西の「広東非基督教運動述論」(『広州社会主義学院学报』2004年4期、34-37頁)のような研究も見られるが、これらの論文は1924年に後の運動に注目したもので、1922年の運動については断片的な紹介にとどまっている。

- (3) 広東軍政府は中華民国臨時約法を護るために1917年に孫文が西南軍閥の支持のもと広東で成立した軍事政権である。1918年の軍政府の改組によって孫文は諸軍閥から見捨てられるが、1920年11月に国民党系の軍閥陳炯明が武力によって広東を統一したことによって再び広州に咲き戻り、1921年5月に広州の非常国会の決定に基づいて新政府を組織した。これを第2次広東軍政府と呼ぶが、それは成立当初から「護法北伐」を主張する孫文と広東自治と自己の勢力基盤の強固を求める陳炯明との間の矛盾を孕んでいた(池田誠『孫文と中国革命』法律文化社、1981年、125-210頁を参考)。
- (4) 陳独秀の広州での教育改革に関しては、唐宝林『陳独秀全伝』香港中文大学、2011年、184-190頁と、村田雄二郎「陳独秀在広州(1920～21年)」『中国研究月報』第496号、1989年6月、1-15頁が詳しい。
- (5) 『広東群報』は台湾の国立政治大学図書館と、京都大学人文科学研究所、北京大学図書館にマイクロフィルム版が所蔵されている。筆者は政治大学と京都大学から同紙を入手したが、欠号が非常に多い。
- (6) 村田雄二郎前掲稿、6頁。同紙が陳炯明の経済的援助を受けていたことについては後述する張亦鏡も指摘があり、彼によると同紙が1922年7月初めに停刊した原因も陳炯明が経済的援助を絶ったことにあるという(知白「広東非基督教大本営群報之停版原因」『批評非基督教言論彙刊全編』上海浸会書局、1927年、359頁)。陳は同年6月に孫文に反対するクーデターを起こしていた。
- (7) そのうち、譚平山は第一次国共合作期に組織部長、農民部長、工人部長などを歴任するが、1927年の南昌暴動後共産党より除名される。陳公博は陳炯明のクーデター(1922年6月)後離党してアメリカに留学、帰国後は国民党に加入

するが、1946年日本に協力したことによって国民政府に処刑される。

- (8) 「基督教学生同盟開会之反響」『広東群報』1922年3月16日。
- (9) 『広東群報』は『非基督教学生同盟号』の宣伝広告も行ったようである。これは同紙1922年3月31日付の記事から確認できる。
- (10) この特集コラムに掲載された反対言論から鄧潤章や郭瘦真、郭寿華など公法の学生たちの名前が確認できる。張亦鏡は前掲「広東非基督教大本營群報之停版原因」のなかで陳公博が所長を務める宣講員養成所(1921年設立)が反対言論の作成などにおいて重要な役割を果たしたと指摘しているが、これら反キリスト教の学生たちは当該養成所を集会や活動の場所として使ったと思われる。
- (11) それらの記事のタイトルをあげると、「非宗教大同盟之進行」(4月7日)、「非宗教同盟之各訊」(4月10日)、「声勢日大之非宗教同盟」(4月14日)、「非宗教同盟之応声」(4月12日、13日、14日、15日、18日、20日、21日、22日、25日)などである。これらの記事は、その内容が北京の『晨报』と上海の『民国日報』と重なるところが多く、合わせて読むと、これらの地方における非基運動の進行をより明瞭に把握することができる。
- (12) 汪精衛著、安藤徳器編譯『汪精衛自叙伝』大日本雄辯會講談社、昭和十六年(1941年)、64頁。
- (13) 今井航「中華民国北京政府期における全国教育会連合会の果たした役割—大会決議の分析を通して」『現代中国研究』第17号、2005年9月、48頁。
- (14) 北京『晨报』は1922年3月28日付の「声勢日大之非宗教大同盟」という記事のなかで汪兆銘の入会を伝えている。
- (15) 前掲拙稿、78-79頁。
- (16) 汪精衛前掲書、60頁。
- (17) 1922年4月7日付の『覚悟』(『上海民報』副刊)は「社会教育与信仰」というタイトルでこの文章を転載した。
- (18) 張亦鏡、前掲書、87、88頁。
- (19) 朱執信の書いた「耶蘇是什麼東西？」(『民国日報』、1919年12月25日)は

## 「非教」と「護教」のせめぎ合い

反キリスト教の代表的な文章で、前述のパンフレットに載っているだけでなく、その後の反キリスト教の運動にも繰り返し利用された。

- (20) 「反対宗教運動之再接再厲」『晨报』, 1922年4月6日。
- (21) 「要慎重些」『広東群報』1922年4月3日。
- (22) 「非宗教論」広州『現象報』, 1922年4月4-5日。上海『民国日報』は「汪精衛之宗教毒民論」(4月15日)と改題してこの文章を転載した。
- (23) 「汪精衛之国民教育論」『広東群報』, 1922年4月21-22日。
- (24) 詳しくみると、初級小学校675か所(19,057人)、高級小学校122か所(4,510人)、中学校37か所(1,929人)。そのほか、高等学校が2か所あった。
- (25) 「非基督運動中之学校影響」『広東群報』, 1922年4月5日。
- (26) 「非基督教同盟運動」『時事新報』, 1922年3月28日。
- (27) 「非基督教学生擬举行大巡遊」『広東群報』, 1922年4月7日。
- (28) 「非基督教同盟之聲応」『広東群報』, 1922年4月22日。
- (29) 「広東非基督教学生同盟会議」『広東群報』, 1922年4月17日。
- (30) 「非基同盟委員会選挙職員」『広東群報』, 1922年4月21日。
- (31) その宣言文は北京の非宗教大同盟と上海の非基学生同盟主張を融合させたような内容からなっている(「非宗教同盟之応聲」『広東群報』, 1922年4月25日)。
- (32) 「非基督教同盟敬告学生」『広東群報』, 1922年4月28日。
- (33) 「非基督教同盟之聲応」『広東群報』, 1922年4月22日。
- (34) 「広東非宗教大同盟定期成立」『広東群報』, 1922年5月19日。このうち、何寿英は当時広東社会主義青年団政治宣伝委員会の委員長であった。郭寿華も1922年に広東社会主義青年に入団した団員であった。
- (35) 「非宗教同盟之大会議」『広東群報』, 1922年5月23日。
- (36) 「非宗教同盟之大会議」『広東群報』, 1922年5月23日。
- (37) 「非宗教同盟委員会選挙主任」『広東群報』, 1922年5月23日。
- (38) 「非宗教同盟之応声」『広東群報』, 1922年4月14, 18, 20, 21, 25, 27, 28日および「各地反对宗教之再接再厲」北京『晨报』, 1922年4月12日。

- (39) 『真光雑誌』の編集者である張亦鏡は、当時これらの同盟が発行した『週刊』の中のいくつかの反対文章に対しても論駁を行っている（張亦鏡、前掲書、「随感録」部分）。
- (40) 「声勢日大之非宗教同盟」『広東群報』, 1922年4月14日。
- (41) 彼らはキリスト教が婦人の人格を踏みにじったという証拠として、ピラで、女はアダムの肋骨からできたものだという説と、婦人が身につけた知識はその夫に帰すべきであり、婦人が集会で発言するのは恥であるという決まりを挙げている（「高師非基督教運動之宣伝」『広東群報』, 1922年4月25日）。
- (42) 「非基督教同盟委員会選挙職員」『広東群報』, 1922年4月21日。
- (43) 「非基督教同盟之声応」『広東群報』, 1922年4月22日。
- (44) 「基督教学生中止巡行」『広東群報』, 1922年4月4日。しかし、これはさらに確認する必要がある。張亦鏡によると、『広東群報』は4月4日の記念会議を反対のため取りやめになったと報道したが、実は会議は影響されずに予定どおりに行われたという（張亦鏡前掲書, 366頁）。
- (45) 『現象報』1922年4月7日。ここでは張亦鏡前掲書, 48-49頁, 楊天宏前掲書, 125頁を参考。
- (46) 張亦鏡前掲書, 49頁。
- (47) 1920年の統計によるとカトリック信徒数が1,971,189人、プロテスタント信徒数が345,853人であった（中華統行委辦会調査委員会編・蔡詠春等訳『1901-1920年中国基督教調査資料（元『中華婦主』修訂版）』中国社会科学出版社, 2007年第2刷, 1268-1269頁）。
- (48) 中華統行委辦会調査委員会編, 前掲書, 137, 1227-1236頁。同時期の非基会系の中国語の新聞雑誌の数は578種に上っていた。中国で最初に新聞雑誌を発行したのはキリスト教宣教師たちで、キリスト教宣教師と彼らが出版する刊行物は清末新政時に大きな影響力を持っていたが、1920年代に入ると完全に中国人に追い越され、その影響力も低下する一途を辿った。
- (49) 「1921年中国基督教（新教）報刊一覧表」, 同上書, 1249-1250頁。

「非教」と「護教」のせめぎ合い

- (50) 査時傑「早期非基運動下基督教会之回応問題」, 査時傑前掲論文集, 443-483 頁。
- (51) 中華統行委辦會調查委員會編, 前掲書, 448, 729-730 頁。
- (52) 同上書, 453-456 頁。
- (53) 中国人民政治協商會議廣東省廣州市委員會文史資料研究委員會編『廣州近百年教育資料』廣東人民出版社, 1983 年, 202, 208, 210 頁。
- (54) 『真光雜誌』については, 王京強「美華浸會書局在廣州的出版事業考述」『暨南學報』2012 年第 1 期(総第 156 期), 151-157 頁と, 黄増章「華南最大の基督教出版機構: 美華浸信會印書局与中国基督教雜誌鼻祖『真光雜誌』」, 宋原放主編『中国出版資料(近代部分)』第 1 卷, 山東教育出版社・湖北教育出版社, 2004 年, 250-259 頁を参考した。
- (55) 張亦鏡に関しては主に, 査時傑「張文開」査時傑『中国基督教人物小伝』(上巻)中華福音神学院, 1983 年, 79-90 頁と, 姜建邦『張亦鏡生平』中華浸會書局, 1949 年を参照した。
- (56) 姜建邦は張亦鏡が初めて『真光雜誌』の編集に携わった年を 1902 年とする(姜建邦同上書, 26 頁。)
- (57) 劉廷芳「非基督教學生同盟」『生命月刊』第 2 卷第 7 期, 1922 年 3 月。簡又文, 范子美, 楊益惠, 応元道, 鄒志堅「對於非宗教運動宣言」『青年進歩』第 54 冊, 1922 年 4 月 10 日。
- (58) 張亦鏡編, 前掲書, 190 頁。
- (59) 楊劍龍『「五四」新文化運動与基督教文化思潮』, 上海世紀出版集團, 2012 年, 149-174 頁。
- (60) この反駁文は『批評非基督教言論彙刊全編』の「隨感錄」というカテゴリーのなかに収められている。隨感錄のなかの文章は言葉が明瞭で短く, ほとんどが『真光雜誌』と『廣東群報』やその影響下にあった学生たちとの舌戦を記録したもので, これらの文章より双方の応酬の熾烈さがよく伝わってくる。
- (61) 張亦鏡「罵人骯髒東西底阮嘯仙」, 張亦鏡, 前掲書, 351-352 頁。
- (62) 鐘可託「中国教会概況」『中華基督教会年鑑』第 8 期, 1925 年, 9 頁。

- (63) 黃增章, 前揭文, 256-258 頁。
- (64) 查時傑「張文開」, 前揭書, 86 頁。
- (65) 張亦鏡「我在大光報混數月及來滬重主真光雜誌筆政之原委」『真光雜誌』第 25 卷第 4, 5, 6 号合冊, 1926 年 7 月, 17-20 頁。